

# 「唯信」の仏道

安 富 信 哉

## はじめに

一九九九年五月、ドイツのマールブルクで、浄土真宗とキリスト教の福音主義神学のシンポジウムが開催され、私もその一員として参加するという機会に恵まれた。シンポジウムのテーマの一つとして「信仰によってのみ―念仏」という対応的なテーマが掲げられた。キリスト教、とくにルターの「信仰によってのみ」(sola fide) という教説は、浄土真宗の「唯信」という指教と響き合うところがあることを気づかされた。これについては、先学より宗教学の立場から「『唯信』と“sola fide”」とこう論文もすでに出されている。

1 (安富)

拙論では親鸞において確認された浄土真宗の「唯信」の

信仰的立場について『選択集』(法然)―『唯信鈔』(聖覚)―『唯信鈔文意』(親鸞)を通して、いささか尋ねてみたい。

## 一 法然

親鸞の信仰について語る場合、法然の導きが決定的な意味をもったことは申すまでもない。その法然の教学を凝集的にあらわしていることは、

南無阿弥陀仏・往生の業は念仏を本とす。

〔『選択集』標挙・『真宗聖教全書』I―192―19、  
『教行信証』行卷所引、真宗聖典一八九頁〕  
という『選択集』の基本的な主張である。

この念仏往生の主張は、申すまでもなく南都・北嶺に代

表される聖道門に説かれる様々な行業、すなわち諸行往生との緊張関係の中で説かれた。法然は、これまでの伝統仏教が依つてきた諸行の無効性を説いて念仏為本を唱道したのである。ここに専修念仏の運動が展開される。聖道門の仏教では、様々な修行が実践される。法然は、鋭い末法の自覚を通して、末法に生きる凡夫が、仏道の課題となる涅槃に至るには、もはや諸行は末法に有効性をもたないことを身をもって実感した。そして、善導『観経疏』との出会いを経て、本願の念仏に依るしかないと自覚し、またそれを世に掲げた。法然は浄土宗の諸行廃捨の立場について、

今さきの布施・持戒乃至孝養父母等の諸行を選び捨てて、専称仏号を選び取る。故に選択と云ふ也。

〔同〕本願章・真聖全一―九四三

と示し、  
謂く、諸行は廢の為に而も説く、念仏は立の為に而も説く。

〔同〕三輩章・真聖全一―九五〇

と説いている。ここにおいて、出家発心を本とせず、捨家棄欲を前提としない、民衆の仏教が開顕される。すなわち男女貴賤、老少善悪が等しく実践できる易行の一道が開示

されることになる。そのことを象徴することばが、念仏為本の四文字である。

ただ法然は、その念仏為本の立場を、その念仏を受けとめる信心の問題と切り離して説いたわけではない。それについて法然は『選択集』において、とくに『観無量寿経』の三心（至誠心・深心・廻向発願心）を具足する必要があることを強調している。それは、

私に云く。引く所の三心は是れ行者の至要なり。所以は何ん。経には即ち三心を具する者は必ず生ずることを得可し。釈には則ち若し一心をも少けぬれば生ずることを得ずと云ふ。明に知ぬ。一も少けぬれば更に是れ不可なることを。茲に因て極樂に生ぜんと欲する人は、全く三心を具足す可き也。

〔同〕三心章・真聖全一―九六六

ということばに明らかである。ここで、法然は、念仏に伴うべき三心を、衆生の上で語っている。この『観経』に説かれる「三心」の必要性について、法然は、『選択集』以外にも、たとえば「三心料簡」や「三心義」などで取り上げて、その意義を釈義している。

と同時に注意されることは、『選択集』に直接言及はされないが、法然が『観経』の三心を『大経』の三心（至

心・信樂・欲生」と同じものとして語っていることである。たとえば、

今此の經の三心は、即ち本願の三心を開く。爾る故は至心とは至誠心なり、信樂とは深心なり、欲生我国とは回向発願心なり。

（『觀無量壽經釈』・石井教道編 昭和十修法然上人

全集一二六頁）

と述べる。これと同趣旨のことは、「要義問答」、「十二問答」にも説かれている。

このように法然は、念仏為本の立場を説くにあたり、『大經』の三心をも視野に入れながら、『觀經』の三心を重視し、さらにこの三心を「深心」の一句に摂さめ

次に深心とは、謂く深信の心なり。当に知るべし、生死の家には疑いを以つて所止と為し、涅槃の城には信を以つて能入と為す。

（『觀無量壽經釈』法然上人全集一二七頁、『選択集』

三心章・真聖全一―九八七）

3 (安富)

と説いた。このように法然は信心こそ正しく往生の因であるという「信心正因」の立場を鮮明に説いた。その意味で、『選択集』に三心章が置かれていることは重要である。ただ、法然はこの三心とともに、称名念仏を修することの大

切さを強調している。『選択集』には三心章に続いて、

念仏の行者四修を行す可きの文

（真聖全一―九六七）

というように、四修章が置かれている。ここでは、念仏の実践生活として「四修」（恭敬修・長時修・無余修・無間修）が説かれている。このことから知られるように、法然は、信心とともに作業（さごう）の大切さを並行して説いている。

この信心と作業との関係は、具体的には称名の遍数はいかにあるべきかという問いを、門弟たちの間に引き起こしたようである。「百四十五箇条問答」をみると、吉水教団の法然の門弟たちの間で称名の遍数が問題になり、法然がそれについて応答している問答の様子が窺われる。法然は、念仏の百萬遍、百度申して必ず往生すと申して候に、命みじかくてはいかがし候べき、答。是れも僻事に候。百度申してもし候、十念申してもし候、また一念にてもし候。

（『百四十五箇条問答』・法然上人全集六四八頁）

とあるように、一念往生の可能性を説いている。しかし同時に法然は毎日の所作は、念仏の遍数を定めて行わなければ懈怠になるから、遍数を定めて日課念仏を行うように門

弟たちに勧め、

念仏をば、日所作にいくらばかり当ててか、申し候べき。答。念仏の数は、一萬遍を初めにて、二萬・三萬・五萬・六萬・乃至十萬まで申し候也。

(「同」・法然上人全集六五〇頁)

と述べた。このように法然は自らは日課念仏を行い、またときには、特別の時期を限つて修する「別時念仏」(「三昧発得記」・『西方指南抄』中本所収、法然上人全集八六三頁)をも行じた。そして最後には

源空は大唐の善導和尚の、をしえにしたがひ、本朝の恵心の先徳の、すすめにまかせて、称名念仏のつとめ長日六萬遍なり。死期やうやく、ちかづくよりて又一萬遍をくわへて、長日七萬遍の行者なりとぞ、おほせられける。

(『法然上人行状絵図』六・法然上人全集二六七)

と伝えられるように、その称名は、日課七萬遍にも及んだのである。

## 二 聖覚

吉水の教団では、法然の日課念仏を眼のあたりにして、門弟たちにも称名念仏が響きわたり、念仏の三昧にひたる

中で、一種の恍惚境を作り出していったものと思われる。念仏のコーラスを通して、戦乱や飢餓などに伴う一切の苦難を忘れ、いわば忘我の境へと誘われていく……。それはひとつの救いとなったが、この三昧境を作り出すために、称名そのものが自己目的化するという事態も生ずることになった。そのような念仏の数量信仰は法然門下で広く流布したようである。たとえば、法然の帰依者であった九条兼実は、しばしば百万遍念仏を行った。

終日元書を沙汰す。夜に入りて念誦を始む。これ阿弥陀名号なり。来るべき十五日に至つて満じ奉るべし。小阿弥陀経の説によるなり。但し念誦の時を除くほかは無言ならずといへども世事を聴かず、念仏の間、信力を専らにすといへども、凡夫の妄心のために境界に従つて乱やすし、一心不乱なるに及ばず、このためいかに、今夜千遍。

(『玉葉』安元三年九月八日の条)

兼実は、安元三年九月八日より十五日までに阿弥陀経の七日念仏の説によつて百万遍念仏を行じたことを記している。しかし実際に念仏百万遍を満じたのは九月十八日であつて前後十日間かかっているのである。いま『玉葉』によつてその毎日の念仏の数量を記すと次のようである。(以下の

算定は、坪井俊英著『法然上人の教え』教育新潮社一〇四頁（一〇五頁による）

九月八日一千遍。九日終日念仏（今日、九万九千遍）。十日、欠。十一日終日念仏（今日十二万五千遍）。十二日（今日念誦十三万遍）。十三日（今日念誦七万遍、夜入雨下）。十四日（入夜雨下念仏六万遍）。十五日（今日終日無言念仏十五万遍）。十六日（今日念仏十万遍）。十七日（今日念仏十万遍）。十八日（今日念誦十四万遍）。百万万遍了。

この念仏の総計は九十七万五千遍となるが、このうち九月十日の数量を欠いているから、もし十日に二万五千遍の念仏を修したとすれば総計百万遍の念仏となる。

このほかに『玉葉』を見ると、「恒例念仏」「恒例毎年念仏」といって、毎年九月八日より十五（四）日まで百万遍念仏を行じており、元暦元年以後は実施の月を一ヶ月早めて毎年八月八日より一週間に亘って念仏を行じている。

『玉葉』を通覧すると、兼実は前後十五回ほど百万遍念仏を行つたように伝えているが、実際に百万の数を満じたのは上記の安元二年の念仏のほか、二、三回であつて、一番少ないときは三十万遍しか唱えておらず、また遍数を記していない年もあつた。実際の程度に百万遍念仏が行われ

たかあきらかでない。

法然の日課念仏の奨励と実践は、法然が期待しなかつた称名の遍数を競うというような、功德主義的念仏・善根主義的念仏を誘発し、ここに一念派と多念派との論争も引き起こされる。『御伝抄』が伝える信行両座の段は、そのよ

うな事態の一端を伝えるエピソードであるものと思われる。上人親鸞のたまはく、今日は信不退・行不退の御座を、両方にわかたるべきなり、…ときに法印大和尚聖覚、ならびに釈信空上人法蓮、信不退の御座に著くべしと云々、…人みな無音のあひだ、執筆上人親鸞自名をのせたまふ。やや暫くありて大師聖人おほせられてのたまはく、源空も信不退の座にはんべるべしと、そのとき門葉あるひは屈敬の氣をあらはし、あるひは鬱悔のいろをふくめり。

〔本願寺聖人親鸞伝絵〕・真宗聖教全書Ⅲ一六四四、真宗聖典七二八頁

吉水の法然の門下にあつたとき、親鸞はそこに集う人々にひとつの問題提起を行つたという。すなわち、信不退で救われるのか、あるいは行不退で救われるのか、という問いである。ここで不退とは、安心の境位をあらわす。

これに対して、信不退の座についたのは、聖覚や信空な

どで、親鸞も信不退の座に名を連ねたが、あとの三百余人は、態度を明確にしなかったという。そして、最後に法然の採決を仰いだところ、法然自身も信不退の座に連なつたと伝えられている。

このエピソードに窺われるのは、念仏において称名それ自体が自己目的化し、信心の自覚的な側面が見失われ、ある意味で、聖道門的な行に退転するという事態を生じたということである。

そのような傾向は、法然の入滅後も浄土宗内部に根強く残つたものと思われる。ここにおいて、信不退の座に着いた聖覚が『唯信鈔』を著す必要が出てきたものと思われる。親鸞は、『唯信鈔』の奥書に、

草本曰

久三歳仲秋中旬第四日 安居院の法印聖覚の作なり

寛喜二歳仲夏下旬第五日 以彼草本真筆愚禿  
積親鸞書写之也

〔『唯信鈔』奥書・真宗聖教全書Ⅱ一七五六、  
真宗聖典九二九頁〕

と記している。本書が著された承久三年（一一二二）は、法然が亡くなって十年に当たる。

『唯信鈔』の「唯信」ということばは、どこに典拠があるのか明確ではない。聖覚自身がこの語の由来について本書の中では述べていない。おそらくこの語は善導の

仰願一切行者等、一心唯信仏語不顧身命、決定依行

〔『観経四帖疏』散善義・真宗聖教全書Ⅰ一五四三、

〔『教行信証』信巻所引、真宗聖典、二一六頁〕

という一節にある「唯信」という語に依っているものと推察される。この題号に聖覚の強い意図、すなわち法然の信心正因の伝統的立場を受け継がねばならないという、明瞭な意図が窺われる。『唯信鈔』は、『選択集』とほぼ同じような叙述の展開で書かれている。おそらく、聖覚は「法然上人の説いた原則に帰れ！」というような意図をもって、『選択集』の要点を仮名法語の形で書き記したのである。本鈔は、概略的には、まず『選択集』教相章を通して、聖道・浄土の二門の決判を行い、つぎに念仏往生の立場を確認する。

ふたつに念仏往生といふは、阿弥陀の名号をとなえて往生をねがふなり。これはかの仏の本願に順ずるがゆへに正定の業となづく。ひとえに弥陀の願力にひかるがゆへに他力の往生となづく。

〔『唯信鈔』・真聖全Ⅱ一七四〇、真宗聖典九一七頁〕

ここでは、二種の往生（諸行往生と念仏往生）を比較して、念仏往生を説き、念仏の一行を選べと勧める。つぎにこの念仏往生の門につきて、専修・雑修の二行わかれり、専修といふは、極楽をねがふところをおこし、本願をたのむ信をおこすより、ただ念仏の一行をつとめて、またく余行をまじえざるなり。

〔同〕・真聖全Ⅱ一七四三、真宗聖典九一九一（二〇頁）と、専・雑二行の得失を論じて、専修念仏を勧める。ここで引用した以上の二つの引用文は、『選択集』二行章によつて、念仏為本の立場を確認するものである。そして、次にその念仏（法）が衆生（機）の上に生きるのは、『観無量寿経』に説く「三心」によるものであることを述べる。

つぎに念仏をまふさむには三心を具すべし、ただみよごうをとなふることはたれの人か一念十念の功をそなえざる、しかはあれども往生するものはきわめてまれなり、これすなわち三心を具せざるによりてなり。

『観無量寿経』には、「具此三心必得往生也、若少一心即不得生」といへり。三心の中に一心かけぬればむまるることをえずといふ、よの中に弥陀の名号をとなふる人おほけれども、往生する人のかたきは、この三心を具せざるゆへなりとこころうべし。

〔同〕・真聖全Ⅱ一七四六、真宗聖典九二二頁）ここでは、『選択集』三心章によつて、『観経』の説く「具三心者必生彼国」とあるように、三心こそ、衆生が浄土に往生すべき必須の条件であることが力説される。『唯信鈔』の説く三心は、『大無量寿経』の三心に会通されることはないが、ただ善導の三心の解釈を通して、とくに二種深信を重視していることが注意される。そしてその『観経』の三心を「信心」の一句に摂めて、次のように説く。

ただ信心のてをのべて、誓願のつなをとるべし。仏力無窮なり。罪障深重のみをおもしとせず、仏智無辺なり、散乱放逸のものおもすつることなし。ただ信心を要とす、そのほかおほかへりみざるなり。信心決定しぬれば三心おのずからそなわる。

〔同〕・真聖全Ⅱ一七五〇、真宗聖典九二四頁）『唯信鈔』は、その前半の文において、「易行道」といふは、ただ仏を信ずる因縁のゆえに、浄土に往生するなり」（聖典九一九頁）という『十住毘婆沙論』のことは引いて、「ただ信ず」といふ唯信の立場を、龍樹以来の伝統に求めた。そして今のパラグラフでは、

ただ信心の手をのべて  
といい、また

ただ信心を要とす

といい、さらに

そのほかおぼかえりみざるなり

という。『唯信鈔』には、法然の名も、『選択集』の題目も言及されることはないが、ここにおいて、浄土宗の信心が本願の仏力を信ずる純潔な信仰であり、他を顧みることがなく、一筋に進む、決断的な信仰であることが明説される。

本書の執筆の由来については、いくつかの推察があるが、法然の遺弟における、このような信心の不明瞭化が、聖覚が『唯信鈔』というタイトルで本書を著さなければならなかった第一の理由であったと考えられる。

### 三 親鸞

親鸞は、このような『唯信鈔』の「唯信」の立場を非常に高く評価し、門弟に対して、何度も『唯信鈔』を読めと勧めている。そのことは『御消息集』(六、八、十一、十二)あるいは、『血脈文集』(二)に窺われる。さらに数回(少なくとも五回)にわたって、本抄を自ら書写し、のみならず、その漢文部分を註釈して、『唯信鈔文意』を著している。ある意味において、「唯信」の仏道は親鸞において成立したといつてよいであろう。親鸞はこの唯信という

立場について、

この本願のやうは『唯信鈔』によくよくみえたり。

「唯信」とまふすは、すなわちこの眞実信樂を、ひとすじにとるころをまふすなり。

(『尊号眞像銘文』・眞聖全Ⅱ一五六一頁、

眞宗聖典五二三頁)

と説いている。聖覚の場合、唯信の心は、『観経』の三心を中心に把えられたが、親鸞の場合それは『大経』の至心信樂として把えられている。またそれが「ひとすじにとるころ」ということで、決定心と連動する。信心をうるといつても、「とる」ということばで表現される。天下りに信心が生ずるのではなく、一筋に選びとつてゆく所に信のあり方があると言われる。

その「唯信」の意義が、最も鮮やかに把えられているのが、『唯信鈔文意』の冒頭において、親鸞が施した『唯信鈔』の題号釈である。

『唯信鈔』といふは、「唯」はただこのことひとつといふ、ふたつならぶことをきらふことばなり。また「唯」はひとりといふころなり。

この「唯」の解釈において、唯信の立場が、ただ一筋の選びの道であることを示すとともに、「ひとり」というよう



に、主体的な信仰であることが示されている。この「唯」を「ひとり」と解釈することは、字義的な解釈ではなく、親鸞の体験を通じた解釈である。ここには親鸞の面目が躍如としたものがある。この「ひとり」に独立者の自覚が窺われる。ここには、ある意味で現代にも響く実存的な信仰の把握がある。

つぎに「信」を解釈して、

信はうたがふころなきなり。すなはちこれ真実の信心なり。虚仮をはなれたるころなり、虚はむなしといふ、仮はかりなりといふ、虚は実をならぬをいふ、仮は真ならぬをいふなり。本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを唯信といふ、鈔はすぐれたることをぬきいだしあつむることばなり。このゆへに『唯信鈔』といふなり。

という。ここでは、信は一切の虚偽を離れた真実絶対なる心であることが明説されている。ここにひとつの問題がある。それは唯信が「この真実信樂を、ひとすじにとるころ」(『尊号真像銘文』)といわれるように、主体的な信であると説かれると同時に、その信が、凡夫の虚仮不実を離れ、誓願に根拠をもつ真実の心であると示されることである。それは信仰のパラドックスというべきであろうか。親

鸞は、

また唯信はこれ他力の信心のほか余のことならばずとなり。すなはち、本弘誓願なるがゆへなればなり。

(『唯信鈔文意』真聖全Ⅱ一六一、

真宗聖典五四七頁)

として、「唯」ということにおいて、決断を示し、同時にそれが凡夫の起す自力の心ではなく、他力の信心であると確認する。このように信心が金剛の信心であり、如来より発起する信心であり、さらに無上大涅槃にいたる信心であるということとは、『唯信鈔文意』の中で展開されてゆくことになるが、いまこの題号釈の中に、「唯信」の基本的な視座が確かめられている。その意味で、この題号釈は、とても大切な意味をもっているものと思う。

おわりに

以上のような親鸞の確かめを経て、「唯信」の立場は浄土真宗の信仰の伝統を作り出すことになるのであるが、この「唯信」の仏道を明瞭に伝えるのは、やはり『歎異抄』であると思われる。承知のように、『歎異抄』は第十三章に、『唯信鈔』の名と、その一節を引いている。江戸時代の宗学者である妙音院了祥は、その『歎異抄聞記』の中で、

『歎異抄』と『唯信鈔』との関係について、一章を設けて論じ、七点にわたって、『唯信鈔』が『歎異抄』に及ぼした影響を説いている。「唯信」の仏道、すなわち「ただ信心」、「信心為要」の立場は、

弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつころのおおるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり。弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし

(『歎異抄』第一章・真聖全Ⅱ一七七三、  
真宗聖典六二六頁)

とあるように、『歎異抄』第一章の冒頭に美事に語り尽くされているように思う。

(本稿は、一九九九年十月二十六日、大谷学会研究発表会にて口頭発表した内容を整文したものである)

(本学教授 真宗学)